

# 鎌倉時代の秦野

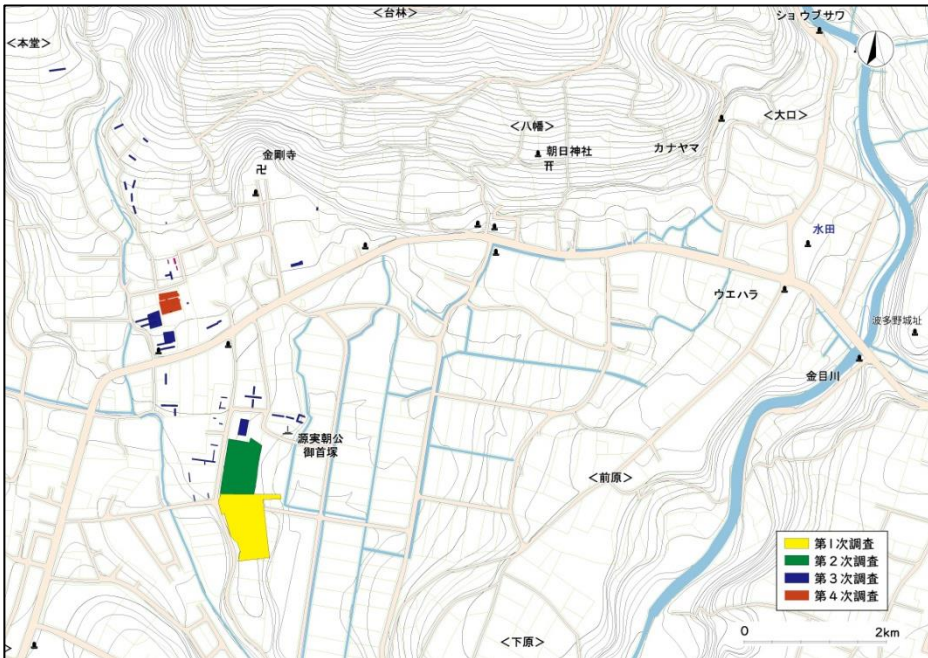
## 一 はじめに

現在の教科書における鎌倉時代の始まりは一一八五年。壇ノ浦の戦いで平家が滅亡した後に、源頼朝が義経追討のために守護と地頭を設置した年とされています。かつては、頼朝が征夷大将軍に任命された一一九二年が鎌倉時代のはじまりと記されていました。大きな歴史区分としても平安時代と鎌倉時代は「古代」から「中世」へ移り変わる大きな境目でもあります。が、歴史学でいえばその境目は非常に曖昧になっています。現在放映中の大河ドラマ「鎌倉殿の13人」の時代はまさにこの混沌とした時代で、政治の中心が京の公家から鎌倉の武士へ移り、その鎌倉で権力を持ち始めた武士達の様子が描かれています。

この展示では、ドラマと同じ頃の秦野市域の様子、この地名を名とした波多野氏はどのように動いていたのか、鎌倉時代のもので推定されている考古遺物や、鎌倉時代の公的な歴史記録とされる『吾妻鏡』などの史料から見えていきます。文献史料が残らず、わからないことも多い秦野の鎌倉時代ですが、モノで残った資料や文字で記された一場面などから、鎌倉時代の秦野の様子を想像してみてください。

## 二 在地領主の館跡 東田原中丸遺跡

東田原中丸遺跡は、丹沢山麓から舌状に伸びる標高約一五〇mの微高地に立地し、周辺は、丹沢から流れる小河川を水源とする水田が広がっています。遺跡内には、秦野市指定史跡「源実朝の首塚」が所在します。平成一二年(二〇〇〇)に実施された発掘調査により、中世の掘立柱建物群、段切遺構、柵列、



東田原中丸遺跡周辺地図

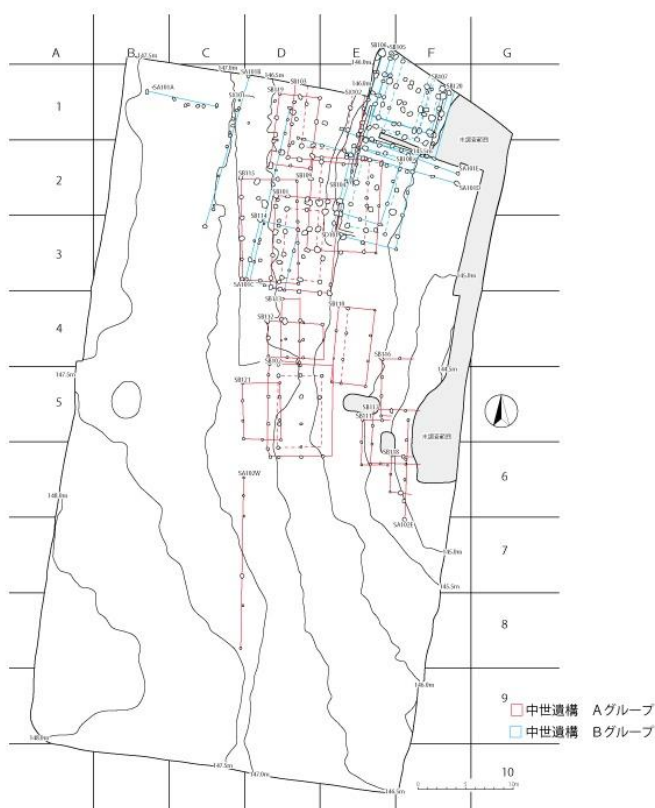
焼土群が検出されたほか、かわらけ、白かわらけや青磁・白磁の磁器類、国産陶磁器といった遺物が出土しました。出土遺物から一二世紀末、一三世紀中頃の遺構だと考えられます。建物の規模や出土遺物の質や量

から在地領主の館跡であったと考えられます。

## (一) 遺構からわかること

東田原中丸遺跡で発見された掘立柱建物は、主軸が異なる2群からなっており、Bグループ→Aグループ→焼土群という遺構群の変遷があったと推定されます。また、掘立柱建物は四面庇を有する総柱式のものも多く、四回程度建替えられたものもあります。

また、第二次調査で確認された中世遺構群は、十二世紀末～十三世紀中頃のもので、その頃、秦野地域を治めていたのは波多野氏であり、発見された遺構群は波多野氏と関連する館跡であると考えられます。



東田原中丸遺跡第二次調査 掘立柱建物群

## (二) 出土遺物からわかること

東田原中丸遺跡から出土した遺物は、かわらけ、白かわらけ、中国製の白磁や青磁、常滑や渥美の国産陶器、長崎産の滑石製石鍋などになります。

これらの発見された遺物は、渋谷氏と関連する館跡といわれる宮久保遺跡（綾瀬市）や上浜田遺跡（海老名市）の中世遺物より量や質が劣るものの、独立農民（名主）の館跡と考えられている三ツ俣遺跡（小田原市）よりも遺物量が多く良質で勝っています。

かわらけは、使い捨ての素焼きの皿のことで、九～一〇世紀に京都で穢れ観念が定着する中で、儀式や饗応等の非日常の場で使用されました。

東田原中丸遺跡のかわらけは、一三世紀初頭～前葉と一三世紀中葉に属す手づくね成形とロクロ成形のものが出土しています。ロクロ成形のかわらけをみると側面が立ち上がるように変化していき、都市鎌倉周辺でみられるものと同じような器形になっています。

東国のかわらけは褐色をしています。京都のかわらけは、「白かわらけ」と呼ばれるほど一般的に白か乳白色あるいは灰白色をしており、京文



東田原中丸遺跡出土 かわらけ・白かわらけ

化を模倣する東国武士団の憧れの一つでした。

東田原中丸遺跡から出土した白かわらけ数点は、その胎土や成形方法から京都周辺の土を使って製作されたものが、鎌倉經由で搬入されたものであると考えられます。

### コラム 波多野城址

天保一二年（一八四一）に成立した『新編相模国風土記稿』には、「村の西境、金目川の傍、字小附（小津久惠）に在、少く高き地にして、空塹を廻らし蹟あり今畑（一町四五段）となる、波多野次郎の城跡と云傳ふ」と記載があることから、大正八年（一九一九）五月に寺山字小附に碑が建てられます。

この周辺は、昭和六二年（一九八七）以降断続的に七回にわたる発掘調査が実施されましたが、城跡と考えられる遺構は確認することはできませんでした。

発見された遺物は、縄文時代中期から後期にかけての土器の量が一番多く、第七次調査で実施された小附の台地上から出土



波多野城址（昭和三〇年代）

しています。また、空堀と呼ばれる部分において、青磁や白磁といった中世の遺物も少量出土したほか、第二次調査では古代の土層から馬の歯が多量に出土しており、雨乞い等の儀式のため投棄されたと考えられています。

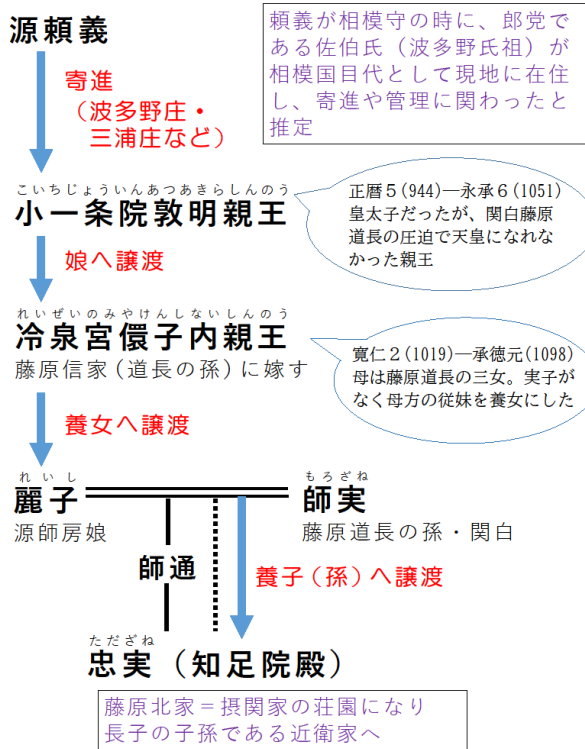
波多野城址の碑は、大正八年（一九一九）四月に史跡名勝天然記念物の法の公布に影響され、郷土の歴史に愛着をもってもらうために設置されたのかもしれない。

## 二 公家から武士へ 平安時代の秦野

平安時代。朝廷で権力を振るった藤原道長が亡くなった年に東国では平忠常（たいらのただつね）の乱が起き、乱の平定のために朝廷から派遣された源氏が東国で地盤を築く足がかりとなりました。波多野氏もこの時から相模へ居住したと考えられています。末期には、武士として京で政治の頂点を掴んだ平家と、鎌倉で武士の集う政治の中心を築いた源氏という武家同士の争いがおき、源氏の勝利の末に東国で武家の政権が誕生します。ここでは、政権が西の公家から東の武家へと移り変わる頃、平安時代の秦野市域と波多野氏の様相を見ていきます。

### 波多野庄伝来過程の推定

（参考：湯山学「波多野氏と波多野庄」より）





執政所抄 十二月

廿八日。冷泉院殿御忌日事

色紙摺經一部、笏賀

素紙經五部

二部 波多野 二部 粟倉

解説

莊園として波多野の名が見られる最初の史料。『執政所抄 (しつせいしよしよ)』は撰閔家の藤原氏で執り行う年中行事についてを後世のために記した記録。年代不詳ですが、藤原忠実が執政する時代の元永元年(一一一八)から保安二年(一一二一)に記され、後に追記もされたと考えられています。内容は、冷泉院殿の忌日にあたり納める素紙經(裝飾のない写經)五部のうち二部を波多野から負担しているというものです。なお粟倉は現岡山県にある地名です。

近衛家所領目録

一請所

(略)

同 国 (信濃国)

英多庄 (埴科郡)

冷泉宮領内

相模国

三崎庄 (三浦郡)

冷泉宮領内

同 国 (相模国)

波多野 (中郡)

冷泉宮領内

甲斐国

小笠原 (巨摩郡)

篤子中宮領内

(略)

建長五年十月廿一日注出之

\* 請所(うけしよ・うけどころ)……地頭・名主など現地の土地管理者が、莊園領主(土地の持ち主)に対して一定額の年貢納

入を請け負い、代わりに年貢徴収など管理を委任される地。

解説

鎌倉時代の建長五年(一二五六)に記された、藤原氏五撰家の筆頭とされる近衛家の所領目録。私的な相伝地や、一定の権利を保有して寺社に寄進した所領など、畿内を中心に一五三か所の庄園が記されています。波多野は近衛家の所有する庄園でしたが「請所」なので、在地領主に管理を委任する庄園だったことがわかります。同じように相模国の三崎が冷泉宮領から受け継がれた請所として記されています。

(一) 平忠常の乱―源氏が東国に基盤をつくるきっかけとなった

時	長元一(四年(一〇二八)三二)		
起きた国(場所)	上総・下総・安房(房総半島・現在の千葉県)		
起こした人	平忠常 <small>たいらのただつね</small>	平定した人	源頼信・頼義 <small>みなもとのもりのぶ 頼よし</small>

上総・下総を掌握していた平忠常が安房国に赴任していた安房守惟忠を焼き殺したことから起こった乱。朝廷からは平直方(たいらのなおかた)ら平氏を中心に派遣するも三年経過しても平定できず、改めて源頼信らが派遣されると、忠常は戦わずして降伏したとされています。波多野氏の祖とされる佐伯経範(さえぎのつねのり)もこの時に頼信の軍にいたと考えられています。この後、直方が鎌倉にある屋敷を頼信へ譲り娘を嫁がせ、これが後に頼朝が鎌倉を拠点とするきっかけになりました。

(二) 前九年合戦―源氏が武士の頭領たる起源として語り継がれた

陸奥国の豪族安倍氏が反乱したとして朝廷から源頼義が派遣

時	永承六〜康平五年（一〇五一〜六二）		
起きた国（場所）	陸奥（福島県、宮城県、岩手県、青森県）		
起こした人	安倍頼時など	平定した人	源頼義

された戦いです。反逆者である蝦夷・安倍氏を征討したとして、源氏の格式を語る上で神話化された戦いでもあります。黄海の合戦では佐伯経範の壮絶な戦死が軍記で語られています。この後の永保三年（一〇八三）に起きる後三年合戦では頼義の子である義家が東北へ赴きました。この頼義・義家の子孫が源氏の中でも力を持ち、源頼朝へ繋がります。

### 『陸奥話記』に記された佐伯経範

前九年合戦は最終的に朝廷軍の源頼義が勝利しますが、黄海（きのみ）の戦いでは大敗し、頼義父子は辛うじて逃れました。この最中に頼義が敵軍に囲まれ絶命したと思われる状況で、佐伯経範は囲みへ入り絶命したとされています。『陸奥話記』の「では、経範が「相模国の住人」で、「將軍に仕えてから三十年になる」と記されており、この戦から約三十年前に起きた平忠常の乱の頃から経範は頼義に仕えていたと推定されます。

### （三）保元の乱―武家である平家・源氏の影響力を強めた

時	保元元年（一一五六）	
起きた国（場所）	京	
起こした人	《勝者》 （皇族）後白河天皇 （摂関家）藤原忠通 （平氏）平清盛 （源氏）源義朝	《敗者》 崇徳上皇 藤原頼長 平中正 源為義

源氏の長は頼義から四代後、義朝の時代に京では皇族や摂関家の内紛が起こり、その解決のために武士が動員されました。結果は後白河天皇方の勝利で、この戦により摂関家の勢力が弱まる一方、武士の影響力が強まり、公家から武家の世へ移り変わる転換点だったとされています。

### 船岡山の悲劇―保元物語の波多野義通

兄弟や親類が敵味方に分かれて戦った保元の乱は、勝利した側から敗者に対する厳しい処罰が求められ、戦後処理でも悲劇が起こりました。軍記の『保元物語』の「義朝幼少の弟ごとく失はるる事」で記される船岡山の一件では波多野義通が登場します。源義朝には幼い弟達がいきましたが、敵として捕らえられた父の為朝だけでなく、弟達も首を刎ねよと指示が下ったのです。義朝はその実行を家来である義通に頼み、義通は京の船岡山で泣く泣く子ども達の首を刎ねた様子が綴られています。

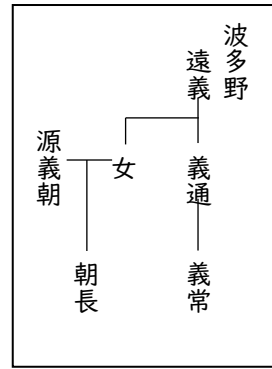
### （四）源平合戦と波多野氏

保元の乱の時に源義朝に従っていたとされる波多野氏は、その後の動向がはっきりしません。その後の平治の乱でも源氏に従ったともいわれますが、吾妻鏡の記述では、源義朝と波多野義通が不和となり、義通は相模に帰ったと記されています。原因は義朝が後継ぎとしたのが、波多野氏の血を引く朝長ではなく頼朝だったからだという説もあります。

その跡を継いだ義常は、伊豆に流された頼朝を数人の豪族と共に訪ねるなど、当初は頼朝との関係は良好だったようです。ところが、頼朝が平家に反し旗揚げをすると状況が変わります。

源頼朝は石橋山の合戦で敗れるも安房に逃れて再起し、相模へ進軍します。『吾妻鏡』文治四年八月二十三日条によれば、

波多野義常は平家方へついたことで、頼朝から攻撃を受けることになり、頼朝は追討のために下河辺行平を派遣しますが、義常はその到着前に松田郷で自殺しました。吾妻鏡には、波多野義常の父である義通が源義朝と不仲となり、保元三年に京を離れて波多野郷に居住していたと記されています。朝長の母は波



多野氏とされますが詳しい履歴は不明で、義朝の後に中原氏へ嫁いだ可能性もあります。朝長は波多野氏の領内である松田にある屋敷で生まれ育ち、松田殿とも呼ばれますが、平治の乱で義朝や頼朝と落ち延びる途中で死亡しました。

### 三 鎌倉殿と波多野の人々

大河ドラマ「鎌倉時代の13人」では、将軍源頼朝を中心に、相模国（神奈川県）を本拠地として活動した人物が数多く登場します。波多野氏も、ドラマに登場した三浦氏や岡崎氏と同様に、相模国で一大勢力を持っていた武士団の一つです。流人として伊豆にいた時代の頼朝の旗下にあり、情勢に翻弄されながらも、鎌倉幕府の成立後は御家人として将軍の下へ馳せ参じた武士でした。また、市内には実朝の首塚と伝わる地もあり、地元で大切に守られてきています。ドラマに登場する場面や人物と波多野氏との関わりを見ていきます。

#### (一) 岡崎義実と波多野義景

『吾妻鏡』文治四年（一一八八）五月四日の項で、頼朝が征

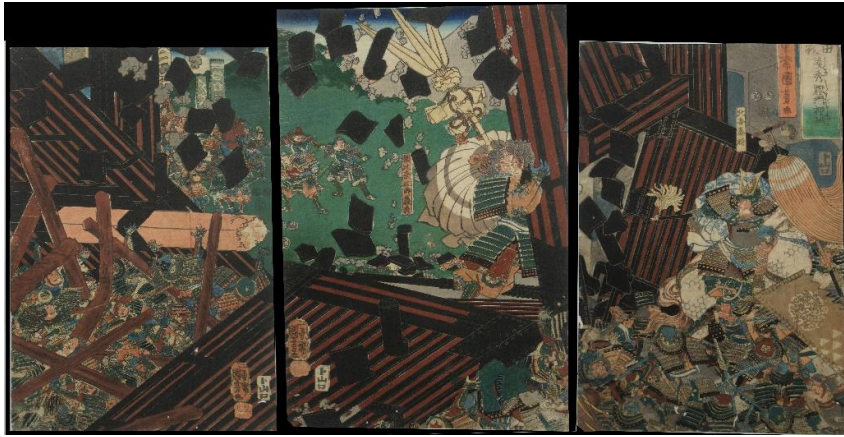
夷大將軍になる以前の出来事。波多野本庄北方の領有権をめぐる波多野義景と岡崎義実が争い、源頼朝の御前でそれぞれの意見を戦わせました。波多野本庄北方について正確なことは判明しませんが、当時の波多野が南北に分かれていたことが推定できます。

波多野義景の外孫であり岡崎義実の内孫である先法師に対し、義景が代々所有していた領地のうち波多野本庄北方の土地をめぐる譲状を与えたところ、義景が役目で京へ滞在している間に、岡崎義実が波多野本庄北方を「望み申」し、帰参した義景はこれは義実の「奸計」であると訴えました。頼朝は岡崎義実を不当と判断し罰を与えました。頼朝の面前で行われる御前対決は重要な訴訟に限られており、頼朝自身が裁決することからも、この争いが当時の頼朝にとって重要視されていたことがわかります。

#### (二) 三浦義村と波多野忠綱

建暦三年（一一一三）五月二日・三日に和田義盛の乱がおこり、鎮圧されます。『吾妻鏡』によれば、五月四日にその戦功をめぐる、波多野忠綱と三浦義村のどちらが先陣を取ったかで争われます。三浦義村は、最初は和田方へ味方になると約束しましたが、それを違え幕府方となりました。そのため、義時は三浦へ褒賞を上乗せするために、忠綱へ功を譲り穩便にすませよう論しますが忠綱はきかず、將軍の御前対決となりました。その場にいた武士の話でも忠綱が先陣だったと証明されましたが、この時に忠綱が発言した「盲目たらんか」の言葉が後の褒賞に影響することになります。

七日に和田義盛の乱で戦功のあった主な人物への褒賞が発表



和田合戦義秀惣門押破（江戸時代）

されます。波多野忠綱もここで褒賞を得られるほどの功はありましたが、先の三浦との御前対決の時に義村を「盲目」と罵ったことが「悪口（あっこう）」とされ、褒賞はありませんでした。ですが、子の経朝へは褒賞が与えられました。北条義時に与えられている「相模国菖蒲」は藤沢市とも秦野市とも説があります。「坂東田原」も市内の東田原・西田原ともいわれいますが、山梨県内の地名ともされ、国名ではなく「坂東」と記されていることから判然としません。

問 「悪口」は、そんなに重い罰をうける罪なの？

答 この約二十年後の一二三二年に制定された鎌倉幕府の法律「御成敗式目」では、悪口の罪は重ければ流罪、軽くても牢に入れる、裁判中に悪口を言えば負けと定められています。忠綱と義村の裁判はそれより前ですが、法律ができる前から 裁判で悪口を言えば不利になっていたことがわかります。

問 どうしてこの土地が褒賞になつてゐるの？

答 和田合戦では御家人が幕府方と和田方に別れて戦

い、敗れた和田方に味方した御家人の土地は取り上げられ、幕府方で戦った御家人へ与えられました。波多野氏も一族が両軍に分かれたので、和田に味方した人の土地が褒賞になったかもしれせん。

### （三）源実朝と波多野

#### 秦野市指定史跡 源実朝の首塚

昭和四六年（一九七一）に伝承史跡として秦野市重要文化財に指定された源実朝の首塚は、地元で「御首塚（みしるしづか）」と呼ばれ、大切にされてきました。五輪塔は、もとは木造だったものを、建長二年（一二五〇）の実朝三十三回忌に波多野忠綱が石造へ変えたとされ、以後の五輪塔は石で作られてきました。この時に変えたとされるもとの木造五輪塔は、現在は鎌倉国宝館へ寄託されています。



源実朝の首塚

#### 記録でみる実朝の首と供養

源実朝の暗殺についてさまざまな説がありますが、共通するのは、甥の公暁（こうぎょう）によって鎌倉で殺され、首をとられたということです。さらに、実朝は子がいなかったため、その死は源氏の将軍がここで絶えたことを意味し、多くの御家人

が悲嘆して出家し実朝の供養を行ったことが記されています。なぜ鎌倉から離れた秦野に実朝の首塚があるのか。現在はその真実を知ることにはできませんが、記録や伝説から歴史の謎を考えてみることはできるでしょう。

『吾妻鏡』建保七年（一二一九年）一月二十七日

建保七年（一二一九年）一月二十七日、鶴岡八幡宮で実朝を殺した公暁は、その首を持って後見の備中阿闍梨の居宅へ行く。食事を出された最中も手を首から離さなかったという。

問 実朝は將軍なのに、なぜ簡単に首をとられてしまったの？ まわりに誰もいなかったの？

答 実朝が鶴岡八幡宮で行ったのは右大臣に任命されたことを任命者（天皇。鎌倉で八幡宮の神が代わり）へ感謝する神聖な儀式でした。多くの武士は鳥居の外で待機し、実朝のまわりは朝廷から派遣された公家と武装をしていない少数の武士だったようです。そのため、防衛が手薄だったと考えられます。

『吾妻鏡』 同年二月二十八日

暗殺の翌日、実朝の妻は髪を切り出家しました。その戒師は退耕行勇でした。また、武蔵守親広（大江広元の嫡子）など御家人百人あまりが実朝の死を哀しみ出家しました。午後八時頃、実朝を勝長寿院の傍らに葬りますが、首の在処がわかりません。五体が揃わないと困るので、昨日に公氏（儀式の前に実朝の髪を整えた人物）が渡された髪を頭として棺に入れま

『愚管抄』建保七年正月二十八日

\* 愚管抄は実朝死後の二年後に僧の慈円によって書かれた記録。慈円は摂関家である九条兼実の弟。京にいて鎌倉へは行っていないので、聞いた話を記していると思われる。

実朝を殺した公暁は、その一番の家臣として三浦義村のもとへ「このようなことをしたので今は自分が將軍である。これからそちらへ行くから取り計らうように」と伝えますが、義村はそれを北条義時へ伝えました。義時は、公暁が一人で実朝の首を持ち大雪で雪が積もる岡山をこえて義村の屋敷へ行くと予想される道へ人をやり、公暁を討たせにいきます。公暁はすぐに討たれずに逃げて、義村の家の板塀まで来て入ろうとしていたところを討たれました。実朝の首は岡山の雪の中を探して出てきたそうです。

問 吾妻鑑では首が見つからなかったから髪を代わりに棺へ入れたと書いてあるけど、愚管抄では見つかったと書いてある。違つのはなぜ？

答 書いた人の立場も場所も違うので、真相はわかりませんが、実朝を供養した後に首が見つかったり、どちらかの記述が間違っているなどの解釈もできますし、実朝の首塚といわれる場所が秦野にある理由も含めて、さまざまな状況を考えてみるでしょう。

### 秦野市重要文化財 金剛寺木造阿弥陀三尊立像

金剛寺に安置される木造阿弥陀三尊立像（もくぞうあみださんそんりゆうぞう）は、中央の阿弥陀如来立像が室町時代から



江戸時代初期、両脇の像は鎌倉時代前期の製作とみられ、今年八月に市の重要文化財に指定されました。両脇の観音菩薩・勢



木造阿弥陀三尊立像

至菩薩は実朝の没後間もない頃に御家人波多野氏らを中心に実朝の供養のために造立されたものと推定され、源実朝の念持仏(ねんじぶつ)という伝承を持っています。その形式から慶派(けいは)と呼ばれる一派の仏師による作と考えられ、中でも肥後定慶(ひごじょうけい)に通じる特徴が見られますが、

## 慶派仏師 肥後定慶

—金剛寺木像阿弥陀三尊立像を作ったかもしれない？

平安時代に有力寺院が仏像を作るようになる。次第に仏師が職業化し、平安時代中期には大仏師として名を馳せる定朝(じょうちょう)がようちよう(ようちよう)があらわれると、やがてその系譜をひいた流派が生まれます。その一つが慶派で、鎌倉時代の初めに運慶や快慶

などが活躍し、仏師の主流を形成しました。

肥後定慶は運慶らの次世代にあたる慶派の仏師です。同じ定慶の名を記す仏師は同時代で三人確認されますが、肥後定慶は京都の鞍馬寺の聖観音像などの作で知られる仏師で、幕府関係の造像にも携わっていたと推定されています。

### 臨済宗の高僧 退耕行勇—金剛寺を創建した？

退耕行勇(たいこうぎょうゆう)は、初め京の仁和寺で真言密教を学び、東大寺で受戒、鶴岡八幡宮寺の供僧となります。臨済宗開祖となる栄西が鎌倉へ入るとその弟子となり、栄西の後を継いで東大寺の大勧進、寿福寺や建仁寺の住持をつとめます。

北条政子、実朝やその妻など、将軍家とも深い繋がりがありました。頼朝の菩提を弔うために北条政子が発願し栄西が開山した和歌山県高野山の禅定院は、実朝の死によりその菩提を弔うために増設され、「金剛三昧院(こんごうさんまいいん)」と改称。行勇が初代長老に就任しています。

### もう一つの「実朝の首塚」

鎌倉市植木にある曹洞宗の寺である龍寶寺(りゅうほうじ)は戦国時代の玉縄城主である北条綱成が開基とされる寺ですが、源実朝の位牌も安置されています。寺のある地は七騎谷という名で、公暁の持っていた実朝の首を持ち去った七騎の武士が付近に隠れていたという話から、この名で呼ばれるようになったといわれています。その七人はなぜ隠れなければならず、どこへ向かったのか。秦野の実朝の首塚との関連は不明ですが、興味深い伝説です。



### 金剛寺の源実朝像

東田原にある臨済宗の大聖山金剛寺は、鎌倉で殺された源実朝の首が持ち込まれ供養したことに始まると伝えています。この像が寺に安置された経緯は不明ですが、江戸時代の製作とみられ、天保12年（1841）に成立の『新編相模国風土記稿』に記されている実朝の木像はこれを指している可能性があります。着色塗料がかなり落ちていますが、正装である束帯と冠を身に着け、手に笏を持つ姿と思われます。当時の人々が実朝にどのような印象を持っていたのか、想像できるのではないのでしょうか。

#### 鎌倉時代の秦野

会期：2022年10月8日～12月25日

会場：はだの歴史博物館第2企画展示室

秦野市文化スポーツ部生涯学習課文化財・市史担当

秦野市堀山下380-3 TEL0463-87-9581・5542